

Monthly Book OCULISTA No.67 「老視のすべて」

正誤表

本書におきまして誤りがございました。p.24～27 掲載の図 3～9 の図の説明文に入れ違いがございましたことを下記の通り訂正させていただきます。

著者の先生、ならびにご関係の皆様には深くお詫び申し上げます。

2018 年 10 月 23 日 株式会社全日本病院出版会

p.24 図 3 説明文

(誤) -6.0D 以上の強度近視例における術前後のコントラスト感度 ICL と・・・

(正) モノビジョンレーシック術後 3 年における矯正視力の変化
術後 3 年にて全体の 95% の例で矯正視力は不変もしくは改善を認め、2 段階以上の低下例はなく長期的に安全性が高いことがわかる。

p.24 図 4 説明文

(誤) レーシック術前の等価球面度数と術前後の球面様収差の関係
レーシックでは・・・

(正) モノビジョンレーシック術後 3 か月と 3 年における屈折誤差
術後 3 か月、3 年にて $\pm 0.5D$ 以内に 83%、46% と術後長期経過し、全体的に regression による低矯正となり、矯正精度が低下している。

p.25 図 5 説明文

(誤) 自然瞳孔下 (完全矯正) でのデフォーカス曲線
Phakic IOL (ICL) と・・・

(正) モノビジョンレーシック術後 3 年の等価球面度数の変化
優位眼 (遠方合わせ)、非優位眼 (軽度近方合わせ) とともに術後 1 か月～3 年で 0.4～0.5D 程度の regression が生じている。

p.26 図6 説明文

(誤) モノビジョンレーシック術後3年における矯正視力の変化
術後3年にて・・・

(正) -6.0D以上の強度近視例における術前後の高次収差変化
ICLとwavefront-guided LASIKの解析径6.0mmにおける術前後の高次収差変化量を示す。強度近視群ではICLと比較してLASIKは術前後の高次収差の増加が大きい。

p.26 図7 説明文

(誤) モノビジョンレーシック術後3か月と3年における屈折誤差
術後3か月、3年にて・・・

(正) -6.0D以上の強度近視例における術前後のコントラスト感度変化
ICLとwavefront-guided LASIKの明所(500lux)における術前後のコントラスト感度変化を示す。強度近視群ではICLでは術後コントラスト感度の向上がみられるが、LASIKでは術後コントラスト感度が低下することがわかる。

p.26 図8 説明文

(誤) モノビジョンレーシック術後3年の等価球面度数の変化
優位眼(遠方合わせ)、・・・

(正) レーシック術前の等価球面度数と術前後の球面様収差の関係
レーシックでは術前の等価球面度数が大きいほど切除量は多くなり、角膜はoblate化(中央が平坦、周辺が急峻)するため、術後の球面様収差は大きくなる傾向にある(Pearson correlation coefficient: $r=0.57$ and $P < 0.001$)。

p.27 図9 説明文

(誤) -6.0D以上の強度近視例における術前後の高次収差変化
ICLと・・・

(正) 自然瞳孔下(完全矯正)でのデフォーカス曲線
Phakic IOL(ICL)とLASIK術後の自然瞳孔下でのデフォーカス曲線を示す。縦軸に裸眼視力、横軸は完全矯正からのデフォーカス(D)を示すが、phakic IOLと比べLASIKは軽度のデフォーカスで裸眼視力が低下する傾向にある。